我々は闘って勝ち、今また勝ち、今後も勝つ！"斗う学友諸君とともに！"

日共テルミドール体制を打倒し、立命館を解放せよ！
全共闘の旗の下、大学法定粉砕！佐藤訪米実力阻止70年安保粉砕闘争へ決起せよ！

全立命の学友諸君、とりわけ法学部の全学友諸君、立命館学園斗争は、昨年12月の日共一民青による新聞社襲撃事件に端を発し、今春一月寮斗争の爆発による四川会館本部バリケード封鎖以来、今や八ヶ月に及ぼうとしている。この立命斗争とは一体何であり、それは学園に何をもたらし、いかなる方向をとろうとしているのであろうか。全ての学友諸君に告ぐ。反共斗法糾弾、一切の弾圧、斗争破壊、誹謗中傷をはねのけ、あらゆる桎梏からの解放を目指して、なお、斗い続けるのである。

▽日共テルミドール体制とは何か

立命館学園の差別性を鮮明に示した、67年東上記師採用問題、法学部大学院の黒い霧と法教授会の腐敗を如実に現した68年延原問題、日共＝民青による教授会支配に抗して来た立命民主主義を圧殺の名によって復権し続けて来た木川ポナパルティズムに対し、我々は明確な革命的展望を提起し、その綱領を宣言してきた。そして相次ぐ原田学園政策に対する一切の妥協を拒絶し、学園民主主義の確立を成し遂げた。

だが、これらの斗いにおいて、我々の徹底的な誤ちは、それらの強い、腐敗せる頽廃に依然として依存した人間は、必然的に腐敗、堕落していることを見抜けなかったことである。従って、武部を頭とする理事会日共系は、1・22の民青武装行動隊の本部バリケードを解除させ、民青の事実上の自己批判と確約書を提出し、日共反革命的武装行動隊において、我々全共闘の実力に屈服し、でたらめの自己批判と確約書を提出し、日共反革命的武装部隊の実力の誇示を待ち続け、それが成功した直後に、一切を破棄したのである。今日20日は、それがまさに現実となって現われたという。これが、立命テルミドール体制の本質である。武部日共理事会は、日共＝民青のファッショ的物理的学内支配＝反対意見の暴力的抹殺によって、ひたすらのみ存在を証命しているのである。

だが、学友諸君、ここで改めてはっきりさせなければならないのは、我々の決定的な錯誤は実にそこにあったのではなく、全面的に総括しなおされば、この立命館民主主義＝反対派は単に個別立命館の問題にとどまるのではなく、戦後革命を圧殺し帝国主義反革命に道を開いたポツダム民主主義と全く同質のものであり、今、20年代、館内バリケードに籠城されたように全国に波及し、新たな帝国主義支配を守り、学園政治支配化への実質的な基礎を固め、同いたものとして存在することに対する挑戦と我々の攻撃が始まっていたのである。だからこそ、そしてなおいま武部理事会は、日共武装集団を飼にせられるなら立命民主主義に固執しようとしている。それは、まさに日本資本主義の国内帝国主義的秩序の再編強化に与し貸すものとしてあるといえる。これが、立命日共テルミドール体制の本質であり、我々は、まさにこれを粉砕する斗いを組まねばならない。

▽敵は明らかに見た！昨年開始を宣言

成程、我々の日常生活の中で、例えば、昨年6月22法学大に対する教授会の学生の自治に対する攻撃、そして、今年2・5学大における機能麻痺は、教授会の公認、あるいは立命民主主義と御体制の問題、関係にあるかも知れない。だが、70年代ファンズム再開を配慮する帝国主義ブルジョワジーの国内帝国主義的秩序の風紀強化は我々の学園内に帝国主義において、一切の批判を抹殺し、全共闘である。全共闘運動こそがこの壊滅的斗いを展開できるとは言ってはいない。武部は帝国主義者であり、学友諸君！一切の帝国を批判的に総討せよ！全共闘法糾弾に結集せよ！闘争を通じることは、反を意味するのだ。我々の未来の反を！

大学法定粉砕！全国学園斗争勝利！
70年安保粉砕！沖縄返還協定粉砕！
武部日共体制実力打倒！
立命民主主義＝反体制！
全国全共闘連合に結集し、11月佐藤訪米実力阻止闘争に決起せよ！

法闘委